

令和 4 年 8 月 29 日現在

機関番号：35409

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02688

研究課題名(和文)「グローバル・パートナーシップ」を育成する多文化間イシュー教材の日米協働開発

研究課題名(英文) The Instructional Materials Development of the Multi-cultural Oriented Issues to Advance "the Global Partnership" Through the Japan-US Collaborative Action Research

研究代表者

小原 友行 (KOBARA, TOMOYUKI)

福山大学・人間文化学部・教授

研究者番号：80127927

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：グローバル時代だからこそ求められる資質・能力の一つである「グローバル・パートナーシップ」を育成するための「多文化間イシュー教材」を、日米間での対話型の「協働的アクションリサーチ」によって開発することを目的とした本研究の成果は、大きく次の3点である。

第1に、アクティブ・ラーニング型の多文化理解学習に関する理論仮説を構築したことである。第2に、理論仮説に基づいて、「相互交流型」「希望創造型」「対立・葛藤型」の3タイプの「多文化間イシュー教材」を開発できたことである。第3に、開発した教材を用いた研究授業を日米の小・中学校で実施し、理論仮説および教材の有効性を実証することができたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的・社会的意義としては、次の3点を指摘することができる。

第1は、7つの「C」を重視した「グローバル・パートナーシップ」を育成する、近未来の新たな多文化理解学習の理論仮説を提案していることである。第2は、教材の日米協働開発や日米両国での研究授業の実施とその評価という、日米間の人的ネットワークを活用した対話型の「協働的アクションリサーチ」(教育実践研究)という、新たな知の創造を目指した研究方法を取り入れていることである。第3は、「多文化間イシュー教材」の日米協働開発を通して、近未来のグローバル教員養成の課題にも応えようとする研究となっていることである。

研究成果の概要(英文)： This research aims to develop the instructional materials that reflect multi-cultural issues. These are considered to be effective in fostering "global partnership," one of the qualities and abilities required in the rapidly evolving global era. The method, known as "collaborative action research," was carried out between Japan and the USA. The result obtained in this research is the following three points.

First, we have constructed a theoretical hypothesis on the new multi-cultural understanding study through the Japan-US collaborative action research. Secondly, based on the theoretical hypothesis, we have developed the multi-cultural issue materials of the following three story types; "mutual exchange type", "hope-creating type", and "conflict type." Third, we are able to try the research lessons using the developed materials at elementary and junior high schools in Japan and USA, and to demonstrate the effectiveness of the theoretical hypothesis and instructional materials.

研究分野：社会科学

キーワード： グローバル・パートナーシップ 多文化理解学習 多文化間イシュー教材 NIE (教育に新聞を)
デザイン思考 協働的アクションリサーチ

1. 研究開始当初の背景

「グローバル・パートナーシップ」とは、平和な国際社会を実現しようとする意欲や意識をベースに、その実現に向かって7つの「C」であるキュリオシティ（好奇心）、コミュニケーション（対話）、コラボレーション（協働）、クリティカルシンキング（批判的思考）、クリエイション（創造）、チャレンジ（挑戦）、チョイス（選択）を行うことができる資質・能力と定義することができる。それは、急速に社会のグローバル化が進展していく中で、文化間での格差が広がり、摩擦や対立が深刻になっている今という時代において、憎しみや悲しみの連鎖を断ち切り、それを乗り越える勇気や寛容性を持つためにも必要不可欠なものである。また、「一方が正義で他方が悪」「どちらかが勝者でどちらかが敗者」とするのではなく、多様な正義を認めどちらも勝者となれるような世界の実現が求められている今日、10年後、20年後という近未来の学校教育を考えると、このような「グローバル・パートナーシップ」を備えた児童・生徒および教師の育成は、最重要な今日的課題の一つであると考えることができる。

このような課題意識から、研究代表者は、これまでにアメリカ合衆国ノースカロライナ州グリーンビル市にあるイーストカロライナ大学のスタッフの協力を得て、日米両国の教員・学生・児童・生徒の相互理解と協力を促進することを目的とした「広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター」を創設するとともに、そのような資質・能力を備えた教員を養成するためのプログラムとして「体験型海外教育実地研究」を開発・実施してきた。引率指導した大学院生は、これまでに108名を数える。

本研究では、日米間で構築された強い人的ネットワークを活用しながら、対話型の「協働的アクションリサーチ」という教育実践研究の手法を用いて、日米共通の「多文化間イシュー教材」（摩擦・対立・葛藤が生まれる論争問題とその克服を目指した問題解決プロジェクトの事例）の開発を目指すものである。

2. 研究の目的

本研究は、急速に進展するグローバル時代だからこそ求められる資質・能力の一つである「グローバル・パートナーシップ」を育成するために有効と考えられる「多文化間イシュー教材」を、日米間での対話型の「協働的アクションリサーチ」という手法を通して開発することを目的とする。具体的には、次の3点を明らかにする。

「グローバル・パートナーシップ」を育成アクティブ・ラーニング型の多文化理解学習に関する理論仮説を、日米協働で構築する。

構築した理論仮説に基づいて、多文化理解学習のための教材として有効と考えられる「多文化間イシュー教材」を、日米協働で開発する。

開発した「多文化間イシュー教材」を日米両国の小・中学校で研究授業を行い、その結果の分析・評価を通して理論仮説および教材の有効性を実証する。

3. 研究の方法

(1) 本研究の手順・方法

本研究では、具体的には、次のような手順・方法によって、研究をすすめていった。

グローバル化時代を生きる児童・生徒に求められる資質・能力である「グローバル・パートナーシップ」を育成するアクティブ・ラーニング型の多文化理解学習の理論仮説を、日米間の協働的な対話を通して構築する。

構築した理論仮説に基づき、教材開発のためのフレームワークを日米協働で作成する。

フレームワークに基づき、教材研究を協働で行い、日米の小・中学校用の共通教材ともなる、次の3種類の「多文化間イシュー教材」を開発する。

相互交流型教材（文化間での相互交流の活動を通してウイン・ウインの関係を構築する（した）人間の問題解決の「ストーリー」）

希望創造型教材（新たな価値の発見や再構築によって未来への希望を生み出そう

としている(した)人間の問題解決の「ストーリー」)

対立・葛藤型教材(文化間での対立やジレンマを克服しようとする(した)人間の
問題解決の「ストーリー」)

開発した教材を用いて、日米の小・中学校で研究授業を(各年度の6～7月に日本で、
また同じく各年度の9～10月に米国で)実施する。

教材開発のためのワークショップを7月に日本で、その有効性の検討のための評価
会議を9～10月に米国で行うとともに、日米共通教材として完成させる。

研究成果をウェブページおよび学会発表・論文等で情報発信し、その普及を図る。

最終年度には、研究成果をまとめた「多文化間イシュー教材集」を完成させる。

(2) 各年次の研究

1) 第1年次(2018年度)の研究

第1年次(2018年度)は、大きく次の5点の研究を行った。

第1に、「グローバル・パートナーシップ」を育成するアクティブ・ラーニング型の新たな多文化理解学習に関する理論仮説とそれに基づく教材開発のためのフレームワークを、日米協働で構築した。第2に、構築した理論仮説に基づいて、多文化理解学習のための教材として有効と考えられる3種類の「多文化間イシュー教材」の一番目のタイプである「相互交流型教材」の実例として、単元「幕末の日米交流物語～万次郎とマクドナルド～」を日米での現地調査に基づいて開発した。第3に、開発した教材を用いた研究授業を、日米両国の中学校(広島大学附属三原中学校と米国ノースカロライナ州グリーンビル市のC.M.エッペス中学校)の第8学年のクラスの生徒に対して実施し、その結果の吟味に基づいて教材の修正・改善を図った。第4に、米国側の研究協力者を11月に招聘し、研究授業の分析・評価のための評価会議を開催するとともに、理論仮説および教材の修正・改善と次年度の研究計画の作成を行った。そして第5に、2018年度の研究成果を、日本教材学会第30回研究発表大会において、「『グローバル・パートナーシップ』を育成する多文化間交流教材の日米協働開発～ジョン万次郎とラナルド・マクドナルドの日米交流物語～」というテーマで自由研究発表を行い、理論仮説および教材の吟味に基づく再修正を図った。

2) 第2年次(2019年度)の研究

第2年次(2019年度)は、大きく次の4点の研究を行った。

第1に、前年度に構築した理論仮説とそれに基づく教材開発のためのフレームワークに基づいて、「多文化間イシュー教材」の二番目のタイプである「希望創造型教材」の実例として、単元「平和を願った二人の少女の物語～禎子とヒロ子～」を日米での現地調査に基づいて開発した。第2に、開発した教材を用いた研究授業を、日米両国の小学校の最上級学年(広島大学附属三原小学校第6学年と米国ノースカロライナ州グリーンビル市のエルムハースト小学校第5学年)のクラスの児童に対して実施し、その結果の吟味に基づいて教材の修正・改善を図った。第3に、米国側の研究協力者を11月に招聘し、研究授業の分析・評価のための評価会議を開催するとともに、教材の修正・改善と次年度の研究計画の作成を行った。そして第4に、2019年度の研究成果を、全国社会科教育学会第68回全国研究大会において、「『グローバル・パートナーシップ』を育成する希望創造教材の日米協働開発～平和を願った二人の少女の物語～」というテーマで自由研究発表を行い、理論仮説および教材の吟味に基づく再修正を図った。

3) 第3年次(2020年度)の研究

第3年次(2020年度)は、大きく次の4点の研究を行った。

第1に、「多文化間イシュー教材」の三番目のタイプである「対立・葛藤型教材」の実例として、単元「ヒロシマの校庭から届いた絵～本川小学校の物語～」を、前年度の日米での現地調査に基づいて開発した。第2に、開発した教材を用いた研究授業を、広島市立本川小学校第6学年の3クラスの児童に対して実施し、その結果の吟味に基づいて教材の修正・改善を図った。第3に、歴史上の人物を学習者自身が新聞記者となって時空を超えて取材し、その成果を「はがき新聞」の形式で表現するというアクティブ・ラーニング型授業の有効性

を、当日の研究授業見学者の間での授業後のリフレクションと、実際に児童が作成した「はがき新聞」の内容分析に基づいて検討した。そして第4に、2020年度の研究成果を、日本NIE学会第17回東京大会の研究・実践交流会で発表を行い、理論仮説および教材の吟味に基づき再修正を図った。

しかし、コロナ禍の影響で、2020年度に予定していた、「多文化間イシュー教材」を用いた研究授業を米国において実施すること、日本において米国側の研究協力者や研究授業協力校の関係者を招聘した教材開発のためのワークショップを行うこと、また米国において研究授業の分析・評価のための評価会議を開催して理論仮説および教材の修正・改善を図ることはできなかった。その結果として、3年間の研究成果をまとめた「多文化間イシュー教材集」を完成させるには至らなかった。そのため、1年間の研究継続を申請し認められた。

4) 第4年次(2021年度)の研究

延長が認められた第4年次(2021年度)は、大きく次の3点の研究を行った。

第1に、第2年次に「希望創造型教材」の実例として開発した、単元「平和を願った二人の少女の物語～禎子とヒロ子～」を、佐々木禎子さんの母校である広島市立幟町小学校の第6学年の児童全員に研究授業を実施し、その結果の吟味に基づいて教材の微修正を図った。第2に、3年間の本研究の成果を踏まえて、広島市教育センターで開催された「平和教育研修」の講座で「広島市の平和教育」の講話と「平和教育の授業の実際」を報告した。また、香川大学でオンライン開催された、日本教材学会中国四国九州支部大会で、『グローバル・パートナーシップ』を育成する教材開発の新視点」と題して研究発表を行った。そして第3に、本研究の最終的なまとめである、「グローバル・パートナーシップ」を育成する「多文化間イシュー教材集」として、研究成果報告書を刊行した。

しかし、予定していた、米国側の研究協力者を招聘した研究授業の分析・評価のための評価会議や、渡米しての研究授業は、残念ながらコロナ禍の影響で前年度同様に2021年度も実施できなかった。

4. 研究成果

「グローバル・パートナーシップ」を育成する「多文化間イシュー教材」の開発を目的とした本研究の成果としては、大きく次の4点を指摘することができる。

第1は、日米間の協働研究チームによる対話型の「協働的アクションリサーチ」(教育実践研究)という手法での教材開発の可能性を提起することができたことである。第2は、多文化理解学習の理論仮説と教材開発のためのフレームワークに基づいて、「相互交流型」「希望創造型」「対立・葛藤型」という3種類のストーリー(物語)性のある「多文化間イシュー教材」を日米協働で開発することができたことである。第3は、ストーリー(物語)性のある歴史新聞による教材の紹介、歴史新聞記者としての個人・グループでの背景の読解(分析・解釈)、個人での「はがき新聞」の作成とクラスでの交流という、NIE(教育に新聞を)を取り入れた3段階の「アクティブ・ラーニング」の学習過程と学習活動は、日米の学校に共通して有効であることの手ごたえが得られたことである。そして第4は、作成された「はがき新聞」の内容分析から解釈すれば、見出し・イラストの表現や意見・考えの内容を見る範囲内ではあるが、各年度に開発したストーリー(物語)性のある教材に込めた「グローバル・パートナーシップ」の重要性に関するメッセージは、日米の児童・生徒にも十分に受けとめられたと判断できたことである。

残された今後の課題としては、次の3点を指摘することができる。

第1の課題は、当初の研究期間の最終年度であった2020年度、また延長が認められた2021年度は、コロナ禍の影響で、渡米しての研究授業の実施や、米国側の研究協力者を招聘した研究授業の分析・評価のための評価会議の開催が全くできなかったことである。結果として、研究が完結するまでには至らなかった。第2の課題は、開発した教材は各年度1つにとどまったことである。理論仮説の有効性を吟味するデータとしては、必ずしも十分なものではない。今後、他の教材の開発や研究授業の実施を繰り返すことを通して、さらに吟味・修正を図っていくことが必要であろう。そして第3の課題は、これが最も重要であるが、本研究で

用いた日米間の協働研究チームによる「協働的アクションリサーチ」(教育実践研究)という手法の難しさである。およそ30年間にわたる日米間の国際交流の実績の中で培われたパートナーとしての人的ネットワークが母体となって、多文化間イシューという研究テーマや具体的な研究授業の実施も可能であったと考えることができる。その意味では、このような国際交流の中での研究的なフレンドシップやパートナーシップをいかに構築し続けていくのかが、今後の大きな課題として残されていると考えられる。

なお、以上のような研究の最終的なまとめとして、下記のような目次の研究成果報告書の作成を行った。

研究の概要

- 1 研究題目
- 2 研究経費
- 3 研究組織
- 4 研究の目的と方法
- 5 研究の経過
 - 「多文化間イシュー教材」開発の理論仮説
 - 1 目標としての「グローバル・パートナーシップ」
 - 2 教材としての3種類の「ストーリー」(物語)
 - 3 NIE(教育に新聞を)を取り入れた「アクティブ・ラーニング」
 - 第1年次の教材開発(2018年度):「相互交流型教材」の日米協働開発
～「幕末の日米交流物語 - 万次郎とマクドナルド - 」～
 - 1 「相互交流型教材」としての本教材の概要
 - 2 授業プラン(日本版)～「幕末の日米交流物語 - 万次郎とマクドナルド - 」～
 - 3 授業プラン(米国版):“ The International Exchange Story of John Manjiro and Ranald MacDonald in the Mid-19th century between Japan and USA ”
 - 4 「はがき新聞」の考察
 - 5 本教材開発の成果と課題
 - 第2年次の教材開発(2019年度):「希望創造型教材」の日米協働開発
～「平和を願った二人の少女の物語 - 禎子とヒロ子 - 」～
 - 1 「希望創造型教材」としての本教材の概要
 - 2 授業プラン(日本版)～「平和を願った二人の少女の物語 - 禎子とヒロ子 - 」～
 - 3 授業プラン(米国版):“ The story of two Japanese girls who wanted Peace: Sadako Sasaki and Hiroko Kajiyama ”
 - 4 「はがき新聞」の考察
 - 5 本教材開発の成果と課題
 - 6 本教材の2021年度の追試(広島市立幟町小学校6年生)
 - 第3年次の教材開発(2020年度):「対立・葛藤型教材」の日米協働開発
～「ヒロシマの校庭から届いた絵 - 本川小学校の物語 - 」～
 - 1 「対立・葛藤型教材」としての本教材の概要
 - 2 授業プラン(日本版)～「ヒロシマの校庭から届いた絵 - 本川小学校の物語 - 」～
 - 3 授業プラン(米国版):“ The two Stories of Honkawa Elementary School on the Pictures from a Hiroshima School Yard ”
 - 4 「はがき新聞」の考察
 - 5 本教材開発の成果と課題
- 本研究の成果と課題
- 1 本研究の成果
- 2 今後の課題

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小原友行	4. 巻 7
2. 論文標題 「グローバル・パートナーシップ」を育成する 希望創造型教材の日米協働開発 ～「平和を願った二人の少女の物語 - 禎子とヒロ子 - 」～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福山大学大学教育センター 『大学教育論叢』	6. 最初と最後の頁 81 94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小原友行	4. 巻 16
2. 論文標題 「グローバル・パートナーシップ」を育成するNIE教材の開発～「ヒロシマの校庭から届いた絵 - 本川小学校の物語 - 」～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本NIE学会誌』	6. 最初と最後の頁 1 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小原友行	4. 巻 6
2. 論文標題 「グローバル・パートナーシップ」を育成する多文化間イシュー教材の日米協働開発～「幕末の日米交流物語 - 万次郎とマクドナルド - 」～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福山大学大学教育センター 『大学教育論叢』	6. 最初と最後の頁 65 76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小原友行	4. 巻 5
2. 論文標題 大学地理教育におけるNIE授業の開発（2）～地域創生をテーマとした単元「新聞記者になる」の実践化～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福山大学大学教育センター 『大学教育論叢』	6. 最初と最後の頁 77-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小原友行
2. 発表標題 「グローバル・パートナーシップ」を育成する教材開発の新視点
3. 学会等名 日本教材学会中国四国九州支部研究発表大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小原友行
2. 発表標題 「グローバル・パートナーシップ」を育成するNIE学習教材の開発～「ヒロシマの校庭から届いた絵 - 本川小学校の物語 - 」～と
3. 学会等名 日本NIE学会第17回東京大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小原友行
2. 発表標題 「グローバル・パートナーシップ」を育成する希望創造教材の日米協働開発～平和を願った二人の少女の物語～
3. 学会等名 全国社会科教育学会第68回全国研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小原友行
2. 発表標題 新たな価値の創造を目指した大学におけるNIE授業の開発～単元「瀬戸内創生をデザインする」の実践化～
3. 学会等名 日本NIE学会第16回鳴門大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小原友行
2. 発表標題 「グローバル・パートナーシップ」を育成する多文化間交流教材の日米協働開発 ~ ジョン万次郎とラナルド・マクドナルドの日米交流物語 ~
3. 学会等名 日本教材学会第30回研究発表大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小原友行
2. 発表標題 瀬戸内の里山・里海創生をテーマとした大学におけるNIE授業の開発 ~ 「新聞記者になる」の実践化 ~
3. 学会等名 日本NIE学会第15回鹿児島大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小原友行	4. 発行年 2022年
2. 出版社 福山大学人間文化学部	5. 総ページ数 133ページ
3. 書名 「グローバル・パートナーシップ」を育成する多文化間イシュー教材の日米協働開発	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ウォーレン サンドラ (Warren Sandra)	イーストカロライナ大学・教育学部・教授	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	タッカー ジョン (Tucker John)	イーストカロライナ大学・歴史学科・教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	イーストカロライナ大学			